

「父の旅立ち」

(2010)

新涼や胸に影持つ父うつら

病床の父の薄目に秋入日

秋入日父は酸素を吸いながら

秋日差すベッドの父の薄目ににも

雪しきり父の胸水溜まりつ



如月の音無き雨に父逝けり
春暮れて父は静かに昇天す
春昼の父は白磁の骨となり
新しき父の墓碑銘花の中
初御空父の遺影の輝けり

父逝けり「花摘も野辺に」口遊み

黎明の紅葉明かりに亡父の影

ち
ち

く
ち
ず
さ



小満の優しき風に納骨す

納骨を終えれば菜の花盛りなり

秋入日書齋に父の後ろ影

ふ
ば
こ

父逝きて文箱開ければ秋の風

亡き父の文箱整然秋の風

お淨土を歩む父なり落ち葉鳴る

御淨土の父の声聞く良夜かな

父逝きて母一人居の家暮るる

笑つている仏の父や 冬桜

「母の旅立ち」

(2019)

母逝きてははささきはは焚火を引き繼つづきぬ

庭焚き火 姥ははに代わりて火を起こす

母逝きて名知らぬ薔薇ばらの母の庭



母の忌に母の育てし薔薇ばらける

母の忌に供えし母の冬はつさうび

母の家母の声する十三夜

縁側に母の面影十三夜

後の月母の気配やそこここに

はだら

母遺す焚火の跡に斑雪

冬温し百年の皺母逝けり

はだら

「主亡き庭」

主亡き庭に蠟梅匂い立つ

は
は

亡母の庭 蠟梅更に匂いけり

ふ
ぼ

父母の亡き古庭蠟梅香り立つ



父母逝きて植生の小屋に夕焼雲

裳袋灯りふるさと暮れにけり

ちちははの顔して二輪帰り花

庭の隅 人目を避けし白椿

古庭に人待つ如し白椿

と

訪う人の無き母の家 白椿

寒椿 主無き家守りけり

残り火に母の魂燻りぬ

くすぶ

しらはえ

海光り白南風に乘り父母還る

白南風に乗りて還りし父母といふ

木瓜の花 殊更紅く亡母偲ぶ

ばけ

あか

はは